

〈文献紹介〉松村吉郎・相原正義編 『地理100時間（上）（下）』

長谷川, 浩

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

16

(開始ページ / Start Page)

68

(終了ページ / End Page)

68

(発行年 / Year)

1988-03-31

地理100時間 (上) (下)

松村吉郎・相原正義編 あゆみ出版 1987年 各2300円

私は千葉県の公立高校に在職して4年になる。形としての授業は成立するものの、その中味に悩む私にとって、本書は多くの示唆を与えてくれる。

本書は日本史、世界史など高校社会科の「たのしくわかる100時間」シリーズの地理版であり、地理教育研究会員の日常の研究と実践をもとに書かれている。上巻は地誌、下巻は系統地理とわけられ、それぞれ50時間で構成される。本書の成り立ちは多くの教師が教室で苦闘している「どう教えるか」にポイントを定め、まとめている。

はしがきには、「生徒たちの手にする地理の教科書の内容はどのようなものだろうか。著者（教科書、筆者注）のなかには種々の苦労をしながらも、生徒たちにきちんとした社会（地域）認識をえさせようと努力したあとのみられるものもあるが、文部省の決めた指導要領の枠が厳しいので“どこで、何が”の物産地理、抽象的な地域の自然・文化の記述に終わっているものが多い」という教科書批判の立場から編集されたことが明確に示されている。1時間の構成は4ページ立てで、「授業のねらい」「授業の展開」「授業のまとめ」がおかれる。「授業の展開」では、生徒に問題意識を持たせる簡単な質疑の例を示し、その上で、教材としての文献資料を示すといった展開で、具体的な授業の流れに沿う構成となっている。

また、本書では、地理教育の最も重要な条件である“現在性”，言いかえると、教材の新しさと地域の現実的的確な把握に注意が払われている。1例として、フィリピンの“『民衆の勝利』後の女性大統領の国の現実”では、フィリピン革命後のこの国を「飢餓の島・ネグロス島」「フィリピンの腐敗を助けた日本の援助」の2つで捉えさせる。現実のフィリピン情勢は、本書の発刊後も新たな展開が見られるが、常に、変化のなかで何を生徒に与え、考えさせるかを提言する。

地理教育は激動の世界と日本を地域を通してとらえ

させる教科である。では、いったい地域の何を取り上げればよいのか。本書のなかの教材は、新聞、雑誌やいわゆる地理に限らない書籍によって成り立つ。そして現代世界を生々と描いていて生徒に生の世界認識を与えるのに役立つと思われる。兎角、生徒の地理観は、地名物産の暗記ということが潜在的にある。本書は旧来の自然決定論、地名物産地理に対する地理教育の書といえよう。

しかし、編集上、時間数が100に固定されていること、1時間が4ページにまとめられていることから内容に食い足りない印象を残した部分もある。また、上巻では西ヨーロッパ、北アメリカ、東南アジア……ときて、世界の最後に社会主義国を置く。その中に北朝鮮と韓国が入っているが、むしろ東アジアとした方が流れがよいと思う。また、北朝鮮やソ連などの資料の一部に多少の異論を持つところもある。しかし、これまで社会主義国の扱いで、一面的「賛美」が見られるところもあった地理教育関係の本のなかで、どの国も客観的に描こうと努力したあとが見られる。その点は大いに評価できることである。

ところで、私の拙い経験のなかから感じたことの1つに、実際の授業における作業学習の重要性が掲げられる。教室では必ずしも地理に興味があるわけではなく座っている生徒に対し、導入としての主題図の作成や統計処理などで、多くの生徒に興味付けするのに役立つことが多かった。本書でも統計などを用いた説明が見られるが、単に客観的根拠としてだけでなく、作業学習を取り入れた方がよいのではないだろうか。

以上、思いつくままに書いたが、本書は経験豊かな地理教師の実践のなかから生み出されたもので、新しい地理教育を模索する本といえよう。地理教育に関心を持たれる多くの方に一読をおすすめしたい。編者の相原正義氏（1958年卒）は本会の会員で、多くの地理教育関係の本を出している。（長谷川 浩）